

資料紹介

『首里城と沖縄神社 資料に見る近代の変遷』の目次および解題

加藤 里織（非文字資料研究センター 客員研究員）

はじめに

かつて首里城内に存在した「沖縄神社」は、大正末期に創建され、1945（昭和20）年の沖縄戦で破壊された。琉球国の王城であった首里城は「琉球処分」後、大日本帝国の沖縄に対する宗教政策、同化政策の施設として利用されていたのである。

本書『首里城と沖縄神社 資料に見る近代の変遷』は、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター共同研究「近現代日本の祭祀空間と海外神社」班の研究成果の一部である。本書は、首里城と沖縄神社を考える資料的前提を提示することを目的に、首里城正殿と沖縄神社に関する写真や図版を中心にしつつ、基本的な文字資料も一部収録して編纂した。この編集・執筆は、研究班の代表である後田多敦と、同班客員研究員の前田孝和、加藤里織が行い、同研究センターの助成を受けて刊行された。概要は以下の通りである。

- ・編著者名：加藤里織、後田多敦、前田孝和
- ・発行所：近現代資料刊行会
- ・印刷・製本所：平河工業社
- ・A4版、396ページ
- ・定価：本体価格7,000円＋税

なお、本書掲載の「首里城年表」の作成・執筆は、同研究班研究協力者の伊良波賢弥が行った。

琉球国や戦前の沖縄を伝える歴史資料の多くは、1945年の沖縄戦で消失した。同様に、戦前の首里城や沖縄神社に関する資料の多くも、戦禍によってほとんど失われている。特に、沖縄神社については、従来注目されることも少なかったことから、写真や図版だけでなく、文字資料や基礎文献なども貴重な価値を持つものである。以上を踏まえて、本書では、戦前期の首里城と特に沖縄神社に関する資料を、可能な限り収録した。本稿では、この『首里城と沖縄神社 資料に見る近代の変遷』の目次および解題、本書の全体像について紹介を行う。

目次と収録資料

本書は、首里城と沖縄神社に関する資料的前提を提示できるよう、資料に解説などを合わせて、全5章で構成している。目次は、「口絵」、「はじめに」、「凡例」があり、続いて、第1章「写真」、第2章「尚家資料」、第3章「その他関連資料」、第4章「図版・地図」、第5章「解説」となっている。巻末には「文献リスト」、

「おわりに」、「首里城年表」、「資料・図版の収蔵先・出典ほか」、そして「執筆者一覧」となっている。

各章や見出しの詳細について、まず「口絵」では、明治期に描かれた首里城古図と、明治・昭和期に作成された首里城地図を計4点掲載した。次ぐ「はじめに」は、研究班代表の後田多敦が執筆した。

第1章「写真」では、現存する首里城正殿の最古の写真として知られる「Temple dans la cour du palais de l'Ô-Sama〔王様の神殿〕」（1877〔明治



写真1 沖縄神社拝殿（首里城正殿、『琉球建築』より）



写真2 沖縄神社本殿（個人蔵）



10) 年5月ルヴェルトが撮影、沖縄県立図書館蔵)から、「沖縄上陸・戦闘／首里城ついに陥落」(1945年5月29日米軍撮影、那覇市歴史博物館蔵)まで計116点を、「首里城正殿」、「正殿・拝殿(不明時期)ほか」、「沖縄神社」、「沖縄神社本殿ほか」、「奉神門、鳥居、御庭、御嶽、上空写真、沖縄戦時」の項目に分けて掲載した。

第2章「尚家資料」では、那覇市歴史博物館が所蔵する琉球王家である尚家に伝わる文書の中から、沖縄神社に関するものとして「百浦添御普請絵図帳 共八冊」、「大正十年十二月七日 為朝公／舜天王／尚円王／尚敬王／尚泰王 事績」、「県社創立ノ義ニ付願」、「大正十三年一月以降 日記 尚家」、「大正十四年度 日記 尚家」、「大正十二年一月以降 庶務書類 尚家」、「大正十三年一月以降 庶務書類 尚家」、「大正十四年七月以降 庶務書類 尚家」、「大正十五年正月以降 庶務書類 尚家」を掲載した。

第3章「その他関連資料」では、「首里市立女子工芸学校敷地一部廃止関係図」、「実業学校位置変更ノ件稟請」、「沖縄県神社明細帳」、「鳥羽正雄の写しの「沖縄県神社明細帳」、「井野次郎知事事務引継書」、「国宝建造物沖縄神社拝殿図(全23図)」を掲載した。

第4章「図版・地図」では、1877年にルヴェルトが撮影した写真を基に作成された「Le château royal à Shiuri」から始まり、「琉球国王城正殿の図」、「沖縄県首里旧城図」、「首里城ノ図」、「首里城古図」、「沖縄県首里旧城図」、「旧首里城図」、「旧首里城平面図」、「首里城略図」、「首里／首里城平面図」の10点と、本書を編集する段階で入手できた「沖縄神社本殿平面図・社殿図・県社創立願書など」(図版・地図8点、文書1点)の合計19点を掲載した。



写真3 「Le château royal à Shiuri」(『Le TOUR DU MONDE』より)

第5章では、「解説」として先述のように二つの論考と、資料所蔵先などについての解説を掲載した。巻末の「文献リスト」では、引用や参考にした文献と論文、新

聞記事の他に、「官報」や「沖縄県立図書館貴重資料デジタル書庫」のような関係各所ホームページなど、首里城と沖縄神社を考えるうえで必要な情報を掲載した。

巻末の「おわりに」は加藤里織と前田孝和が執筆した。「首里城年表」は、1372(洪武5)年から第二次世界大戦が終結した1945年までの事項を収録した。年表は先述のように伊良波賢弥が作成・執筆した。「資料・図版の収蔵先・出典ほか」では、収録した資料の「原資料種類」、「出典・所蔵者」、それに所蔵先の資料番号などを「備考」として掲載した。最後に「執筆者一覧」で、各人のプロフィールを掲載した。

以上のように、本書では全体を通じて、琉球国の王城であった首里城が大日本帝国によって沖縄神社へとその姿を変え、第二次世界大戦で破壊されるまでの経緯を、写真や図版などで追えるような構成になっている。また、その理解を助けるために、基本的な文字資料も収録した。本書に掲載した資料は総計150点である。

さらに、解説として、後田多敦「琉球国御殿から近代の首里城・沖縄神社へ」、前田孝和「県社沖縄神社の歴史と祭祀」と題した二つの論考を収録した。これら論考によって、首里城と沖縄神社の位置付けを具体的に知ることができるほか、加藤里織「資料から見る首里城と沖縄神社」では収録した資料の所蔵元などについて詳述し、首里城と沖縄神社に関する資料がどのような場所に存在・保存されているのかも知ることができる。

おわりに

最後に、首里城と沖縄神社は、大日本帝国と沖縄、大日本帝国の宗教政策など、多様な論点や問題を浮き彫りにし、それらを具体的に伝える資料としての価値があると考えられる。本書は、この首里城と沖縄神社を考える資料的前提を提示することを目的に、写真・図版などの視覚資料に、基本的文献資料も合わせて掲載したことで、いくつもの角度から読み進めることができる構成となっている。関連する資料は、可能な限りの収録を目指したが、紙幅の関係で全てを掲載するまでには至っていない。また、収録した資料について詳細な検討も十分ではなく、課題として残された。この残された課題は、「首里城と沖縄神社 論考編」として改めて刊行できればと思う。そのために今後も資料の収集と整理を進め、本書を含む「首里城と沖縄神社」研究が、非文字資料研究の一助となるよう努めたい。以上の点も含めて、関心のある読者は気軽に手に取ってもらえればと願う。

【引用・参考文献】

田辺泰・巖谷不二雄『琉球建築』座右宝刊行会、1937
M.Jules Revertégat「Une visite aux îles Lou-Tchou, 1877」『Le Tour du Monde, XLIV, 21, 1882